

## 病虫害の発生概況

### 〔病害発生概況〕

#### 1. 稲・麦

育苗期の水稲では、ピシウム、トリコデルマ、リゾクトニア等による苗立枯病は全般的に並～少発生であった。宮崎県では早期水稲の育苗でもみ枯細菌による苗腐敗症の発生が初確認された。苗いもちは、ほぼ平年並みの発生であったが、宮崎県の早期水稲でやや多発生した。育苗期間中の高温・寡照が原因と考えられた。

本田期においては沖縄県を除き6～7月にかけての低温、寡照、8月上旬の曇天多雨のため、福岡、佐賀、大分県の早期水稲に、福岡、佐賀、長崎、大分県の普通期水稲で葉いもちが多～やや多発生した。出穂後の天候不順が予想されたために鹿児島県を除く九州各県で穂いもち注意報が発令された。穂いもちは、福岡県の普通期栽培の極早生種で多発し、佐賀県では早植え、普通期水稲の出穂期～成熟期が曇天多雨であったため多発生となったが、他の県では天候の回復と防除の徹底により葉いもちからの進展は少なく、おおむね平年並～少発生であった。

紋枯病の発生時期はほぼ平年並みであったが、8月上旬～中旬に急激に発生が増加し、出穂期まで病斑の進展が続き、佐賀、長崎県の早期水稲でやや多発生、福岡、佐賀、宮崎県の普通期水稲で多～やや多発生となった。佐賀県では早植え、普通期水稲に注意報を発令した。分けつ数が多く株間が多湿条件になりやすかったこと、7月中旬、8月上旬～中旬の降雨等が原因と考えられた。出穂期以降の上位葉への進展は各県とも比較的緩慢であった。

もみ枯細菌病は出穂期前後の好天のため少～やや少発生にとどまった。ばか苗病は熊本県の普通期水稲で、心枯線虫病は鹿児島県の早期水稲でやや多発生した。その原因として種子更新、種子消毒の不徹底が考えられた。

萎縮病が福岡、熊本県で、稲こうじ病、墨黒穂病が佐賀県で多発生した。墨黒穂病は発生生態が不明で、予察方法や防除方法が確立していないため問題となった。また、株腐病の発生が宮崎県川南町で九州地域では初確認され、特殊報が発令された。

麦類では、赤さび病が福岡県でやや多発生であったが、うどんこ病は全般的に少発生にとどまった。赤かび病は、気象予報で4月の天候不順が予想されたため、熊本、佐賀、長崎、福岡、大分県で注意報が発令されたが、出穂期～成熟期にかけて好天が続いたため、全般的に少発生となった。

#### 2. 野菜・畑作物

ナス科の野菜では、ナスすずかび病が福岡、佐賀、鹿児島県の施設栽培でやや多発生し、うどんこ病が熊本県

の露地でやや多発生した。トマトでは葉かび病が長崎、宮崎、鹿児島県の施設で、疫病が熊本県の施設でやや多発生、うどんこ病が鹿児島県の施設で多発生した。灰色かび病は熊本県の露地、大分、宮崎県の施設でやや多発生し、宮崎県ではトマト、キュウリ等に注意報を発令した。3月の天候不順と耐性菌の増加が原因と考えられた。ピーマンでは、鹿児島県で台風及び多湿時の摘心のため軟腐病が多発生し、沖縄県でうどんこ病、モザイク病がやや多発生した。青枯病は全般的に並～少発生にとどまった。

ウリ科野菜ではキュウリのべと病が佐賀、長崎、熊本、宮崎県の施設でやや多発生、うどんこ病が福岡、宮崎県で、モザイク病及び炭そ病が宮崎県で多～やや多発生した。宮崎県ではキュウリ、ピーマン等の冬春果菜類のうどんこ病及びモザイク病に注意報を発令した。褐斑病は大分、宮崎、鹿児島県で多～やや多発生であった。ブルームレス台木の普及及び天候不順が原因と考えられた。スイカでは菌核病が熊本県で3月の高温、多雨により、疫病が6～7月の降雨により大分県で、炭そ病が鹿児島県でやや多発生した。メロンではうどんこ病が長崎県で、つる枯病が鹿児島県でやや多発生した。熊本県では年間の作付回数増加により土壌消毒期間が十分でないため黒点根腐病、えそ斑点病の発生が問題になった。カボチャでは、鹿児島県において台風により圃場の浸冠水等のため白斑病、軟腐病、斑点細菌病が多～やや多発生した。

イチゴでは、うどんこ病が多発生し、九州全県は注意報を発令した。4～5月の少雨、初期防除の不徹底、株冷・夜冷栽培の増加、本圃への罹病株の持込み等による考えられた。また、灰色かび病が長崎、鹿児島県でやや多発生し、長崎県は注意報を発令した。

タマネギでは、暖冬により生育が軟弱徒長となりポトリチス菌による葉枯病が佐賀県で多発生し、注意報が発令された。ニンジンでは、うどんこ病が長崎、鹿児島県で、菌核病及び白絹病が鹿児島県でやや多発生した。10～11月の乾燥が原因と考えられた。

アブラナ科野菜では、キャベツ根こぶ病が大分県で多発生した。福岡県では前原市、糸島郡で多発生し、育苗床の汚染、前年に発生した圃場に定植したことが原因と考えられた。熊本県では平坦地での発生が確認された。菌核病が福岡、鹿児島県の冬キャベツでやや多発生し、2～3月の天候不順が原因と考えられた。べと病が鹿児島県の春キャベツでやや多発生した。沖縄県で春ダイコンに、熊本県で夏ダイコンにモザイク病がやや多～多発生した。6～9月の好天のためアブラムシが多発生したためと考えられた。

ジャガイモでは鹿児島県の春作に疫病がやや多発生し

た。サツマイモでは鹿児島県で立枯病が多発生した。マルチ栽培, 感受性品種の作付増加, 5月の少雨による土壌の乾燥が原因と考えられた。ダイズでは, 台風の影響を受け佐賀, 宮崎県で葉焼病がやや多発生, 佐賀県でべと病が多発生した。

3. 果 樹

カンキツでは, かいよう病の発生時期が暖冬のためやや早く, 九州各県でやや多〜多発生し, 鹿児島県を除く九州各県で注意報が発令された。そうか病, 黒点病はほぼ九州全域でやや多〜多発生し, 熊本, 宮崎県ではそうか病の注意報を発令した。昨年多発生した灰色かび病は開花期以降の降水量が少なく, 全般的に少発生であった。佐賀県では, 8月上中旬の多雨, 寡照と8月下旬以降の晴天により日焼果 (炭そ病) がやや多発生した。

ビワでは灰斑病が鹿児島県でやや多発生となったが, 越冬病斑が多く, 6〜8月の降雨が原因と考えられた。

ナシではうどんこ病が佐賀県で, 胴枯病が福岡県でやや多発生した。モモせん孔細菌病, ブドウべと病が福岡, 大分県でやや多発生となったが, 8月の台風の影響による多雨が原因と考えられた。

カキではうどんこ病が福岡, 熊本県で多〜やや多発生, 炭そ病が鹿児島県でやや多発生となった。

クリ, キュウイフルーツ, 熱帯性果樹では, いずれの病害も少〜並発生にとどまった。

4. 茶樹・特用作物

茶樹では赤焼病が福岡, 鹿児島県で多〜やや多発生したが, 2〜3月の低温が原因と考えられた。福岡県で輪斑病が多発生, 炭そ病, もち病がやや多発生した。8月の台風の影響による天候不順が原因と考えられた。

桑, イグサ, サトウキビでは, いずれの病害とも少〜並発生にとどまった。

(九州農業試験場地域基盤研究部)

1992年 稲主要病害虫の発生面積

(単位: ha)

病 害 虫 名	福 岡	佐 賀	長 崎	熊 本	大 分	宮 崎	鹿 児 島	沖 縄
<b>(病 害)</b>								
業 い も ち	26,800	16,170	10,400	11,300	20,600	18,529	15,145	72
穂 い も ち	22,600	9,333	1,500	5,800	7,020	20,912	11,863	40
紋 枯 病	46,600	30,087	11,500	20,600	25,400	20,712	23,652	88
白 葉 枯 病	3,000	10	40	220	1,485	412	0	8
も み 枯 細 菌 病	12,300	9,209	2,000	5,700	6,900	835	4,532	—
縞 葉 枯 病	3,100	736	1,100	900	1,300	171	675	2
萎 縮 病	5,000	832	1,200	4,000	4,070	1,680	4,164	—
黄 萎 病	0	0	560	2	—	885	1,411	—
ご ま 葉 枯 病	3,700	3,733	2,800	500	7,200	2,153	3,083	452
ば か 苗 病	5,100	1,356	1,600	600	7,000	2,432	2,925	2
小 粒 菌 核 病	—	1	800	100	900	0	0	—
心 枯 線 虫 病	100	0	100	100	5,600	—	4,761	4
内 穎 褐 変 病	—	—	—	—	—	—	12,527	—
<b>(虫 害)</b>								
セ ジ ロ ウ ン カ	50,500	34,422	20,180	24,600	28,000	23,622	31,119	248
ト ビ イ ロ ウ ン カ	24,400	16,322	15,000	26,000	6,670	7,184	10,233	191
ヒ メ ト ビ ウ ン カ	17,500	5,000	8,000	4,300	3,400	18,654	4,197	4
ツ マ グ ロ ヨ コ バ イ	53,700	34,806	18,500	33,000	23,000	25,383	20,260	256
コ プ ノ メ イ ガ	48,300	26,396	15,000	6,000	21,550	7,295	22,291	184
イ ネ ッ ト ム シ	4,500	2,208	700	1,000	6,500	3,096	5,023	7
イ ネ ヨ ト ウ	1,900	368	1,600	300	910	1,714	220	—
フ タ オ ビ コ ヤ ガ	160	0	80	150	1,420	1,023	101	4
ア ワ ヨ ト ウ	3,100	736	20	500	2,300	1,158	181	—
ニカメイチュウ第1世代	1,360	0	0	—	350	0	0	0
ニカメイチュウ第2世代	2,100	0	0	—	250	0	0	0
イネミズゾウムシ	21,300	7,500	6,000	5,750	15,822	23,318	9,578	263
イネゾウムシ	6,200	1,840	3,000	200	4,600	1,810	5,913	3
斑点米カメムシ類	10,800	7,360	11,000	3,400	11,800	8,490	14,482	30
イネクロカメムシ	30	5	50	100	420	69	334	12
スクミリンゴガイ	5,736	4,762	1,289	4,300	2,196	3,121	3,081	74
総作付面積(256,507)	53,700	36,800	20,180	53,100	33,000	26,300	32,600	827

注) 九州各県は早期, 普通期の, 沖縄県は一, 二期作の合計を示す。

## 〔害虫発生概況〕

### 1. 稲・麦

水稲：本年は稲の主要害虫として重要度の高い海外飛来性のウンカ・コブノメイガの発生量が少なく、その他の害虫も特に大規模な発生もなく平穏な年であった。

セジロウンカ、トビイロウンカの飛来は一部の地域(鹿児島県など)でやや早めであったが、主要な飛来波は7月第1半旬から第4半旬までにみられ、その飛来量は少～並であった。その後の発生も少～並で発生量は平年に較べて少な目であったが、一部の地域ではトビイロウンカによる坪枯れも発生した。コブノメイガの飛来量も全般的にやや少なく、発生量も少～並であった。

ヒメトビウンカ、ツマグロヨコバイの発生もやや少～やや多で、直接的な吸汁害が問題になることはなかった。長崎県でヒメトビウンカが媒介する縞葉枯病の注意報が発令されたが、同病の発生量は平年並みであった。

斑点米カメムシ類は暖冬の影響で越冬量が多く、九州南部の早期水稲や九州全域の普通期水稲で問題となった。鹿児島、熊本、佐賀県で注意報が発令された。

イネミズゾウムシの発生面積は約90,000haに達したが、発生圃場の増加傾向はやや頭打ちになった。発生地域での本年の発生量は並～やや多であった。

スクミリンゴガイの発生面積も約25,000haに拡大した。特に被害が顕著なのは佐賀と長崎県のクリーク地帯で、移植をやり直す圃場もみられた。

麦：特筆すべき害虫の発生はみられなかった。

### 2. 畑作物

ダイズ：ハスモンヨトウは、フェロモンによる誘殺数では平年並～やや多の地域が多かったが、圃場での発生は各県とも少～並で少な目の発生であった。

ジャガイモ：長崎県の春作でアブラムシの発生がやや多かった。秋作では並みの発生であった。ジャガイモガや食葉性ヤガ類の発生は並みであった。

サツマイモ：鹿児島県でイモキバが多発した。ナガシロシタバやハスモンヨトウはやや少～並の発生であった。沖縄県でのイモゾウムシとアリモドキゾウムシの発生は平年に較べてやや多かった。

### 3. 野菜

近年九州地域の施設野菜・花き類では新発生・侵入害虫の問題が相次いでいる。依然として衰えぬ被害を出しているミナミキイロアザミウマ、タバココナジラミに続いて、1991年に宍岐のキクで初めて確認されたマメハモグリバエが分布を拡大し、沖縄、宮崎、熊本県以外の九州全域に侵入した。キク、ガーベラ、アスター、トマト、インゲン、ナスなどで発生が確認された。本種は幼虫が葉の中に潜って食害するためトマト等では葉枯れが生じるほか花き類では商品価値が著しく低下する。多くの農業に対して感受性が低く防除を困難にしている。今後最

も警戒を要する害虫である。

トマト、キュウリ、ナス、ピーマン：タバココナジラミの発生が目立った。本種は吸汁害、廃拙物によるすす病の発生のほか、トマト、カボチャ、インゲンなどでは着色異常果を発生する。本種はオンシツコナジラミと混同されやすく、また、薬剤感受性が低く登録農薬が少ないことが防除を困難にしている。ミナミキイロアザミウマは各地(福岡、佐賀、熊本県等)の夏秋ナスで発生がやや多かった。その他の作目・作型では少～並の発生であった。福岡と鹿児島県で本種の薬剤感受性の低下の可能性が指摘された。大分と佐賀県のミニトマトでトマトサビダニが発生して特殊報が発令された。

メロン、スイカ、カボチャ：熊本県の春夏メロン、秋冬メロン、鹿児島県の一部の地域の抑制メロンやカボチャでコナジラミ類が多発した。アブラムシ類、ミナミキイロアザミウマ、ハダニ類は概してやや少～並の発生であった。

キャベツ、ハクサイ、ダイコン、レタス：コナガ、ヨトウガ、ハスモンヨトウ等は平年並みかそれ以下の発生であった。鹿児島県の茶園近くの秋冬ダイコンでチャノキイロアザミウマが発生し商品価値の低下をもたらした。

イチゴ：ハダニ類、アブラムシ類、ハスモンヨトウは大分県でやや発生が多かったが他の地域は少～並の発生であった。

その他の野菜：佐賀県のタマネギでネギアザミウマが多発した。タマネギの収穫後は周辺のアスパラガスやレンコンに移動して被害を与えた。福岡や大分県の一部の地域の夏ネギにシロイチモンジヨトウが多発した。鹿児島県の春どりエンドウやインゲン(早熟)でナモグリバエが多発した。

### 4. 果樹

共通：カメムシ類は越冬であったため越冬量が多く、前期にナシ、カキ、カンキツ、モモ、キウイなどで九州全県に発生し、注意報が相次いで発令された。しかし、主要な増殖源となるヒノキ、スギの毬果が非常に少なかったため、後期の発生は極めて少なかった。カンキツ、ナシのアブラムシが好天と合成ピレスロイド剤に対する抵抗性の発達のため発生が多かった。

カンキツ：カメムシ類が前期に熊本県で多発、鹿児島県でやや多発した。アブラムシ類は佐賀、熊本県で多発、福岡、長崎、宮崎、鹿児島県でやや多発した。ゴマダラカミキリが福岡、熊本県の管理不良園でやや多発した。ミカンハダニが佐賀、長崎、熊本、大分県の冬期マシ油を散布しなかった園でやや多発ないし多発した。ミカンハモグリガが長崎、熊本県でやや多発した。佐賀、長崎、熊本、鹿児島県では合成ピレスロイド剤抵抗性ミカンハモグリガが発生した。沖縄県のカンキツに寄生するサビダニはミカンサビダニではなく別種(和名：リュウキュウミカンサビダニ)であることが明らかにされた。ナシ：カメムシ類が前期に福岡、佐賀、熊本県で多発

し、長崎、大分県でやや多発となった。アブラムシ類が佐賀、熊本県で多発、福岡、長崎、鹿児島でやや多発した。

カキ：カメムシ類が前期に熊本県で多発し、福岡県でやや多発した。鹿児島県ではチャノキイロアザミウマがやや多発した。福岡県ではフジコナカイガラムシが多かった。

モモ：カメムシ類とコスカシバが大分県でやや多発した。モモハモグリガが鹿児島県でやや多かった。

ブドウ：チャノキイロアザミウマが大分、鹿児島県でやや多発した。

クリ：管理不良園ではクリタマバチが熊本で多発、大分県でやや多発となった。熊本県でカツラマルカイガラムシがやや多かった。

熱帯果樹（沖縄県）：バナナでバナナセセリが11月以降、マンゴウでホコリダニ類がやや多発した。また、マ

ンゴーにマンゴーフサヤガ（仮称）が新たに発生し、特殊報が発令された。

#### 5. 茶 樹

チャノキイロアザミウマが佐賀と鹿児島県で、カンザワダニが佐賀、熊本、鹿児島県で、クワシロカイガラムシが鹿児島、佐賀、長崎県でそれぞれ平年よりやや多い発生であった。ハマキガ類は、佐賀県でチャノココクモンハマキがやや多かったことを除き、平年並みかやや少な目の発生であった。

#### 6. 特用作物

サトウキビ：沖縄、鹿児島県とも特に問題になった害虫はみられなかった。カンシャコバネナガカメムシは沖縄県でやや少、鹿児島県では並の発生、アオドウガネは沖縄県の常発地を除くと並の発生、カンシャクシコメツキ、メイチュウ類も並～やや少な目の発生であった。

（九州農業試験場地域基盤研究部）